

氏 名 津田 命子

学位(専攻分野) 博士(学術)

学位記番号 総研大乙第 233 号

学位授与の日付 平成26年9月29日

学位授与の要件 学位規則第6条第2項該当

学位論文題目 アイヌ衣文化の研究

論文審査委員 主 査 教授 岸上 伸啓
教授 吉田 憲司
教授 佐々木 史郎
名誉教授 吉本 忍 国立民族学博物館
客員教授 佐々木 利和 北海道大学
副学長/教授 本田 優子 札幌大学

論文内容の要旨

Summary of thesis contents

本研究は従来の日本の先行研究が触れていない点を課題としている。衣服の素材は古くは毛皮と皮革であったが、いつからか樹皮や草皮が加わり、のちに木綿織物や絹織物も利用するようになった。形、縫製手法、文様なども時代毎に変化してきた。しかし、その変化がどのような環境の下に生じ、どのような過程を経たのかについてはまだ明らかにされていない。文様についても、布や糸の素材や、縫製技術の歴史的な変化と、アイヌ衣服に施された文様の構成には深い関連性がある。本研究は布、毛皮、皮革、魚皮等の素材を用意し、それを裁断、縫製して衣服を作成し、そこに文様を施す。この一連の作業に習熟した人の視点に立っている。

アイヌ女性の諸先輩からアイヌ文化の精神文化、もの作り文化の一端を教示されたことと、自ら衣服の製作をおこなってきたことが本研究の土台となっている。加えて博物館等に収蔵されている伝世資料の熟覧、先行研究の文献資料の整理をおこなった。アイヌ文様には男性が彫刻するものと、女性による刺繍がある。ここでは女性が手がけたアイヌ衣服について論考をおこなった。

先行研究では、アイヌ衣服がどのような素材からどのような素材に変化してきたかに触れてはいる。先行研究ではアイヌ衣服の分類と、そこに施文されたいわゆるアイヌ文様の名称等に軸足をおいている。それはおもに国内に保有されている伝世資料によって研究されてきたからである。

先行研究が著された時代には、世界のどの地域にどのようなアイヌ民族の伝世資料が保存されているかの調査が進められていなかった。現在、ロシアやドイツなど欧州の博物館に収蔵されるアイヌ民族の伝世資料が調査報告されている。そこには収集者や収集地、収集年代の明らかな衣服資料が報告されている。

誰が何時、何処で収集したかという情報が得られたことで、その衣服資料が作られた時代の製作手法が明らかになった。本研究は諸外国の資料調査が進展した現在だからこそ可能になったものである。その国外に保有された情報を伴う衣服資料から、衣服の施された文様の変遷を物語る重要な情報が読みとれた。本稿の目的のひとつは、アイヌ衣服の変遷をあきらかにすることである。

第1章ではアイヌの地理的な居住範囲と地域ごとの衣服の違いを概観する。樺太・千島・東北・北海道の各地域にそれぞれ特色がある。地域ごとに接触した異文化からの影響がみられる。

第2章ではアイヌの衣服と文様に関する先行研究を検討する。村上島之允以降、主として素材による分類が行なわれてきた。また、文様については鷹部屋福平以降の蓄積がある。近年において模様を単位に分割する研究が多いが、それは必ずしも妥当ではない。模様を分割した名称にしても、モレウのように古くから確認できるものは少ない。アイウシ、シクノカなどの名称はむしろ近年になっていけば研究者主導で定着したものである。文様全体の構成も、大陸からの模様モチーフの伝播だけでは説明ができない。実際には文様全体は連続しており、単位に分割することは困難である。このことは萱野茂の唱える結界としての文様という考え方と合致するように思われる。

第3章では衣服の素材と構造と仕立て方を作り手の視点から説明する。北海道を中心とする地域では古い時代から糸がつくられ、毛皮の利用、植物繊維の利用がみられる。アイヌの衣服の模様は他の民族にみられない、布を重ねる独特の技法によっている。また、衣

(別紙様式 2)
(Separate Form 2)

服の様子は衣服が魔除けとしても考えられていたこととも関係している。

第 4 章では素材による衣服の分類と時代による変遷を明らかにする。改めて衣服を素材から分類する。まず獣皮衣、魚皮衣、鳥羽衣について確認する。次に植物繊維によるアットゥシ、テタラペについて述べる。素材それぞれに特徴がみられる。アイヌ固有の衣服はこの 5 種である。最後に外来の衣服と木綿衣について述べる。これらは固有の衣服に比較して新しい時代のものである。

第 5 章ではアイヌの衣服に施される文様に着目し、その種類と時代による変遷について述べる。まず、商品としてのアットゥシについて確認する。江戸時代の粗製濫造によって技術的な後退がみられたとの先行研究の推測を支持する。同時にアットゥシ製造技術自体は現在まで継承されてきたことを指摘する。

第 6 章ではアイヌ文様の構成法について述べる。考古遺物等にすでに曲線による文様がみられる。伝世品では身体尺の使用が明確に分かる。文様も身体尺と「半分の原則」によって構成される。そのさいには目印・糸印をつける。また、刺繍すべきところを先に縫って印をつけておくイエシンニヌという方法がとられた。模様構成についてはなるべく具体的な説明をしてある。

第 7 章では伝世品の文様について述べる。18 世紀から 19 世紀初頭にかけての資料には文様に曲線・交差などがみられない。19 世紀初頭に収集されたブロムホフ資料のアットゥシはそれらのほぼ最初の事例と考えられる。また、当時すでに「半分の原則」が存在していたことが確認できる。それらの資料からは、大陸からの影響とは思えない独自の発展の様子がみてとれる。次に木綿衣の文様の変遷について述べ、いくつかの仮説を提出する。チヂリの文様は本来コトゥッカ（先行研究でいう「切り伏せ」）があったものが失われた結果誕生したものと考えられる。カパラミアはおそらくルウンペにヒントをえて誕生したものである。

第 8 章では視点を換えて「アイヌ絵」と呼ばれる江戸時代から明治初期にかけて盛んに制作された絵画に着目し、そこに描かれている衣服と文様を分析して、絵画の中で描かれているものの、現存しない形の衣服と文様について述べる。蠣崎波響の『東武画像』は刺繍による曲線文様を描いた最古の資料である。村上島之允は実際の観察にもとづいた資料をのこしたと考えられる。また、ロシアの絵画資料の特徴は、実際にロシアに収蔵されている資料と一致する。

結論では 1～8 章までの記述を土台として、「製作者」としての視点からアイヌの衣服と文様に関する分析、考察結果を述べる。伝世品の観察からモレウとアイウシ文様の出現を指摘した。また、その構成法や一筆描きできるなどの特徴からも、これらは動物などの具象模様起源があるのではなく、縄という具象物から、魔除けの結界として作りだされたものと考えられる。アットゥシだけでなく、ルウンペやカパラミア、チカラカラペ、チヂリなどどのような木綿衣でも同じ文様構成の原則によっている。

博士論文の審査結果の要旨

Summary of the results of the doctoral thesis screening

本論文は、研究者とは異なる作り手の視点からのアイヌ衣文化に関する、初めての体系的な研究である。本論文は「はじめに」と8つの章、結論からなる。

「はじめに」では執筆者のアイヌの衣服作りへの取り組みと、それを論文にしようとするに至る経緯を説明するとともに、研究目的を提示している。続く第1章では、アイヌの歴史とアイヌの衣服の地域ごとの概観について述べている。

第2章ではアイヌの衣服と文様に関する研究史をレビューする。そこでは江戸時代から現代に至るアイヌの衣服と文様に関する記述と研究を丹念にたどり、アイヌの衣服と文様の大陸文化との歴史的関係と機能について従来の研究を紹介する。その中で、文様が持つ霊的防御機能に着目するべきであると指摘している。

第3章では衣服について、素材（動物素材か植物素材か）、植物素材の場合には糸の素材（樹皮、草皮）と糸づくり、仕立て、衣服の機能、そして他民族の衣服との歴史的関係などについて記述と分析を進めている。とくに本章では、衣服に施される文様に病気や悪霊から身を守る機能がある点を強調している。

第4章では、同じく衣服について、素材別の種類（動物素材の衣服、植物素材の衣服）、外来の材料（木綿、絹）で作られる衣服、そして時代による衣服の素材と仕立て方の相違について、細かく解説している。ここでは多数の衣服を自ら仕立てた作り手ならではの詳細な記述がなされている。

第5章では、近現代におけるアットゥシの衰退と木綿衣の普及というアイヌ衣服の歴史的变化について論じている。そこでは江戸時代末から明治時代にかけてアットゥシが商品として大量に生産された過程でかつての精密な糸づくりと緻密な織りの技術などが失われた点が指摘されている。

第6章では、アイヌ衣服に施される文様についての分析を行う。アイヌの衣服を18世紀のものから時代を下るように時系列的に吟味して、その変遷を細かく追っていく。江戸時代以降のすべてのアイヌ衣服は、文様の見た目は違っていても、手と指（手尺）で測り、衣服の素材を半分にして目印をつけるという原則に基づいて、製作されたということを実証した。

第7章では、アットゥシおよびアイヌ木綿衣の文様について現存する18世紀の木村謙次資料や19世紀前半収集のプロムホフ資料ほかを比較検討している。筆者は、ここで従来アイヌ文様の典型とされてきたモレウとアイウシと呼ばれる基本形の使用の変遷を明らかにした結果、衣類に施されるアイヌ文様がこの2つの基本形に集約されるという従来の学説に疑問を呈し、文様として縫い付けられた布片ごとに施された刺繍が、次第に布片を越えてつながるように施されるようになり、最終的に一筆書きのように続く刺繍へと発展した、と考える。その結果モレウ（渦巻き文様）、アイウシ（棘のある文様もしくは括弧形文様）のように見える文様が生まれたのであり、文様自体が具体的な事物を表現しているわけではないと指摘している。この部分は第6章の手尺を用いた施紋原則の解明とともに、本論文の最も秀逸な部分である。

第8章では江戸時代から明治初期に多数描かれたアイヌ絵と、アイヌを描いたヨーロッパの絵画を比較検討し、衣服の形、素材、文様についての分析を行っている。その結果、素材の違い、文様の変遷を的確に描いていることを指摘するとともに、現代では既に失われている素材や仕立て方法、文様の衣服が、絵画に残されていることを示した。

そして結論では本論文の成果を要約して、アイヌ文様の持つ霊的防御機能、近現代にお

(別紙様式 3)

(Separate Form 3)

ける大量生産による糸づくりと織りの技術の劣化、衣服や文様を制作する際の長さの単位としての手尺と半分にして目印をつけるという原則の存在、文様生成の変遷、そして、アイヌの衣服や文様の研究におけるアイヌ絵資料などを研究することの重要性を指摘している。

著者の津田命子はアイヌ民族出身であり、アイヌの衣服や編み袋、刺繍、組み紐の作り手である。津田はこれまで北海道各地に古老を訪ねアイヌの衣服の製作技術などを学ぶとともに、国内外に残るアイヌ衣資料の熟覧調査を行ってきた。また、北海道立アイヌ総合センターの学芸員としてアイヌ文化の普及啓発に努めてきた。本論文は、作り手の視点からのアイヌ衣服製作およびアイヌ文様製作の技術誌とでも呼べるが、製作体験や作り手の楽しみに言及するなど研究者がこれまで見過ごしてきた点をすくい上げるユニークな研究となっている。特に、次の3点は学術的にきわめて重要であると考えられる。

第1は、アイヌの衣服や文様の製作において手尺が利用されていた点を現存資料の詳細な調査から明らかにした点である。これは試行錯誤を重ねてきた作り手だからこそできた発見である。

第2は、これまでアイヌ文様の基本的特徴と考えられてきたモレウとアイウシは、既存の資料やアイヌ絵に描かれた衣服の検討に基づけば、両者が出そろったのは18世紀末以降である可能性が高いことを明らかにした点である。これによりこれまでのアイヌ衣文化研究の成果を見直す必要性が出てきた。

第3は、アイヌ文様の意味は、文様を最小単位に分割して理解するのではなく、悪霊や病気から身を守るためにアイヌが縄を使って結界をつくる慣習との関係から理解すべきであると指摘した点である。津田は、袖口や裾など衣服の外縁部の刺繍文様は、悪霊や病気から身を守るための結界である点を強調している。

これらの点はきわめて独創的な見解であり、今後のアイヌ衣文化研究に大きな影響を与えられよう。一方、本論文に若干の問題がないわけではない。衣服の部分や縫製技法あるいは刺繍の技法の名称に関するアイヌ語と日本語の比較対照研究に若干の不備が認められることと、素材だけでなく、形態や機能による分類の検討も必要だったのではないかと、などの点である。しかし、これらの点は本論文の独創性をおとしめるものではなく、むしろ今後の課題として研究されるべきことであると考えられる。

以上を総合的に評価して、本審査委員会では全員一致で博士の学位を授与するにふさわしい論文であると判断した。